



1. 令和6年度原種の生産について

当会社では、茨城県主要農作物等種子条例に基づき、県から委託を受け、原種苗センターにおいて、主要農作物（稲・麦類・大豆）の原種生産業務を実施しています。

原種生産業務では、主要農作物の種子栽培を行う採種農家の圃場に必要原種を確保するため、県農業研究所で栽培された原原種をもとに、原種苗センターの圃場18.1ha（水田10.5ha、畑7.6ha）において、県の指導を受けながら、原種の生産を行っています。

原種苗センターでは、優良な原種を生産するた

め、作付け切替時の作業競合を避け、稲、麦類、大豆別に1年1作を原則とした圃場利用を行うとともに、圃場での変種や異品種の異株抜きや、混種防止のための機械や施設の分解清掃を徹底して行っています。

また、収穫した原種は、適正に乾燥や調製をしたうえで、低温貯蔵庫で保管管理し、品質を保持したうえで、採種農家に供給出来るよう努めています。

令和6年度は、稲5品種、麦類4品種、大豆2品種の原種生産を行う予定です。

【令和6年度原種生産計画】

種類	作付面積(a)	生産数量(kg)	生産品種
稲	585	17,550	5品種（あきたこまち、コシヒカリ、ゆめひたち、あさひの夢、夢あおば）
麦類	808	16,160	4品種（さとのそら、ゆめかおり、きぬの波、ミカモゴールドン）
大豆	247	2,876	2品種（里のほほえみ、納豆小粒）
計	1,640	36,586	



田植期の水稲（夢あおば）圃場



収穫期の麦類（ミカモゴールドン）圃場

も く じ

1. 令和6年度原種の生産について	1
2. 高品質米生産に向けた7月～9月の水稲の栽培管理と適期の収穫・乾燥	2
3. 茨城県における斑点米カメムシ類の発生状況と防除対策について	4
4. 米穀情勢について	6
5. がんばる種子生産者！（常陸農業協同組合種子生産部会）	7
6. 穀物改良部ニュース	8
(1) 令和7年播種用大豆・そば種子生産委託計画が了承	
(2) 令和6年度茨城県採種部会協議会総会開催	
(3) 令和6年度稲作・そば共進会の参加者募集	

2. 高品質米生産に向けた7月～9月の水稻の栽培管理と適期の収穫・乾燥

茨城県農業総合センター 専門技術指導員室 寺門 ゆかり

1 水稻の生育状況

本年の気温は、4月以降平年より高めに推移しており、水稻の生育はあきたこまちで概ね平年並み、コシヒカリで平年並～やや遅くなっています。

長期気象予報によると、7月以降は平年よりも気温が高くなると予想されていますので、ほ場を良く観察し、水稻の生育や病害虫の発生状況把握に努めて下さい。

夏の高温対策としても「基本技術の徹底」が収量の安定化や品質維持につながりますので、水稻の生育に合わせた適切な管理を心掛けましょう。

2 中干し後の水管理は「間断かんがい」が基本

中干しは、幼穂形成期（出穂前25日頃）までに終了し、その後は「間断かんがい」を行います。出穂までは3～4日程度の湛水管理（入水後に自然落水）、その後は落水状態を1～2日程度保つというサイクルを繰り返します。

出穂後は出穂前よりも綿密な水管理を行い、図1のように湛水の継続日数を2～3日、落水後は田面が乾く前に入水します。

また、ほ場の透水性（縦浸透）が良いと根の活力が高まりますので、暗渠施工田では、暗渠の排水量を調節して透水性を高めておくといでしょう。

落水時期については、早過ぎると胴割粒の発生等による品質低下を招くので、早生品種で出穂後25日以降、中晩生品種で出穂後30日以降を目安とします。用水が早めに停止してしまうほ場では、直前に十分入水しておくか、排水路から汲み上げ

て入水する等の対策を講じて下さい。

3 適正な穂肥施用

(1) 穂肥の効果と施用量

近年、省力化の観点から穂肥を施用しない事例が見受けられますが、施用しないと高温年には品質の低下を助長します。穂肥は粒の充実・肥大に重要ですので、適正な生育量を確保した上で、適期に適量の穂肥を施用し収量や千粒重を向上させます。穂肥の適量は標準で窒素2kg/10a程度ですが、地力を勘案して増減しましょう。

(2) 穂肥の実施時期

幼穂の形成は出穂の約30日前頃から始まります。この時期に窒素が十分に供給されると、一穂に着く粒数が多くなり多収となりますが、同時に下位節間が伸びて倒伏し易くなります。そのため、粒数確保と下位節間長のバランスが取れる適期に穂肥を実施することが重要です。

穂肥の適期は品種によって異なります。倒伏しやすい「コシヒカリ」は出穂前15日頃、倒伏に強い「あきたこまち」では出穂前18～20日頃に行うのが基本です。

(3) 「コシヒカリ」の倒伏を防ぐ穂肥判断

出穂前20日頃に草丈と葉色から判断します。草丈が80cm以下で葉色4以下なら窒素2kg/10aを施用し、それ以上の生育量があれば、施用時期を遅らせるか施用量を控え、毎年倒伏程度が大きいほ場などは穂肥の施用をとりやめましょう。

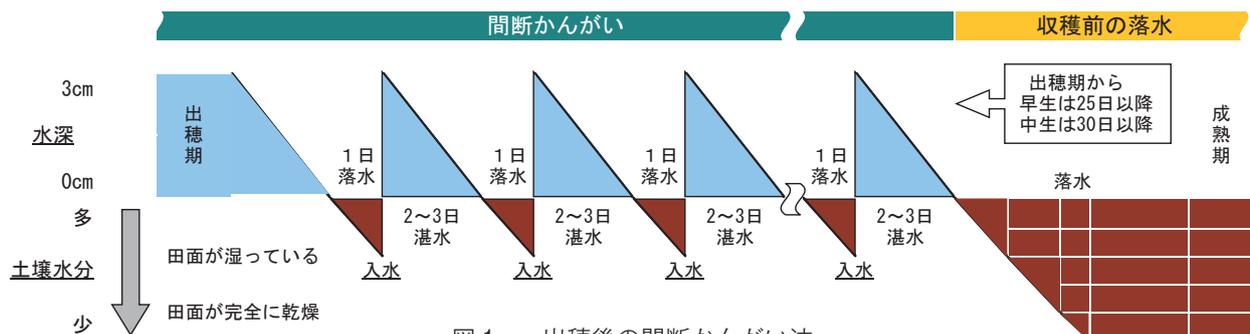


図1 出穂後の間断かんがい法

4 斑点米カメムシ類の防除

本県の水田においては、稲穂を加害する斑点米カメムシ類のうち、クモヘリカメムシ（図2左）が最も多く発生しますが、近年は県南地域を中心にイネカメムシ（図2右）による被害も増えてきています。



図2 斑点米カメムシ類の成虫
(左:クモヘリカメムシ、右:イネカメムシ)

穂揃期にクモヘリカメムシの成虫を多数確認した場合は、直ちに薬剤散布を行きましょう。また、乳熟期（出穂後10～15日頃）に幼虫を確認した場合も薬剤防除が必要です。イネカメムシは斑点米だけでなく不稔も発生させる恐れがあります。①不稔被害の軽減には出穂期～穂揃期、②斑点米被害の軽減には乳熟期に防除を行ってください。

例年、カメムシ発生量が多い地域は、穂揃期と乳熟期の2回防除を検討して下さい。地域によって発生時期や発生量が大きく異なるので、実際にはほ場で発生状況を確認し、防除を行ってください。特に周辺ほ場と出穂時期がずれている場合、カメムシ類の被害が集中しやすいので注意して下さい。

5 収穫は「適期」の見極めが重要

早刈りは未熟粒や青米が多く千粒重も軽くなるため、収量や品質が低下します。一方で、刈り遅れてしまうと胴割粒や着色粒が多くなります。特に、登熟初期を高温で経過した場合、刈り遅れによる胴割粒が発生しやすくなるので注意が必要です。

出穂期から収穫までの目安は35～40日間程度ですが、最終的には「帯緑率（青味の残っている籾の割合）」で収穫適期を判断します。収穫適期

は、帯緑率が10～5%となる約5日間です。ただし、大規模水稻経営体等で、収穫作業終盤が刈り遅れになることが予想される場合には、収穫作業を適期より2～4日早く開始するといいでしょう。収穫期が近づいたら、平均的な生育をした株の穂を観察し、表1を参考に収穫作業の計画を立てて準備を行いましょ。

表1 帯緑率による収穫適期判定目安

帯緑率 (%)	収穫適期
20	6～7日前
15	4～5日前
10～5	適期
3	刈り遅れ

6 収穫は籾水分が25%以下になってから

湿った籾をコンバインで収穫すると、籾の詰まりが発生しやすくなるだけでなく、損傷粒の増加や選別不良の原因となり、乾燥時の燃料費も増加します。収穫作業は籾水分が25%以下まで乾いてから効率的に行いましょう。朝露が消えた10時頃から開始するのが安心です。

また、収穫直後の籾を長時間そのまま放置すると、穀温が上昇して品質低下を招くので、収穫後はすばやく乾燥機に搬入し乾燥させましょう。

7 乾燥方法の工夫で品質・食味の低下を防ぐ

胴割粒は検査等級の低下だけでなく、精米時碎米の原因となり、食味の低下を招きます。胴割粒発生防止には「二段乾燥法」が有効です。まず、常温通風または低温での加熱乾燥により水分17～18%まで乾燥させ、半日～1日程度貯留して水分の均一化を図ります。その後、再度加熱乾燥して水分15%に仕上げます。二段乾燥ができない場合は、1時間程度の常温通風乾燥によって水分のばらつきを少なくできます。

乾燥の目標水分は15%ですが、その手前で乾燥機を一旦停止し「手持ちの水分計」で確認して仕上げるようにして下さい。14%以下の「過乾燥」は、食味を低下させるので注意しましょう。

3. 茨城県における斑点米カメムシ類の発生状況と防除対策について

茨城県農業総合センター農業研究所病虫研究室 平岩飛鳥

斑点米カメムシ類は、水稻の籾を吸汁加害する害虫です。加害を受けた籾は、不稔や斑点米になり、品質低下や減収につながることから適切に防除を行うことが大切です。

県内での発生状況

病虫害防除所が実施しているすくい取り調査によると、斑点米カメムシ類の発生量は2015年以降多い傾向にありましたが、ここ数年は少なくなっています(図1)。しかしながら、今年度は果樹カメムシ類の発生が多くなっており、斑点米カメムシ類の発生についても注意が必要です。

イネカメムシの発生が増加

斑点米の原因となるカメムシ類は約65種いますが、その中で、県内の水田に発生して問題となる主なカメムシ類は、クモヘリカメムシ、イネカメムシ、アサスジカスミカメの3種です(表)。特に、イネカメムシの発生は、近年、茨城県をはじめ全国的に増加傾向にあり、問題となっています。県内では、2010年以降発生地点数が増加しており、県南・県西地域ではイネカメムシが優占種となっています(図2)。

イネカメムシは、体長約13mm、茶褐色で背部のへり部分が黄白色のカメムシです。県内では基本的に年1~2世代を経ると考えられており、成虫で越冬し、7月の早生品種出穂に伴い水田に飛来、穂を加害しながら交尾・産卵します。その後、卵からかえった幼虫も穂を加害しながら成長して約1か月後に成虫となり、晩生品種等の出穂直後の

水田に移動し、水稻の収穫前には越冬地へと移動します。本種は夜行性で昼間は株元に潜んでいるため、日中に見つけることは難しいですが、皆さんの地域の水田でもイネカメムシが増加しているかもしれません。

イネカメムシの増加要因は明らかになっていませんが、温暖化や斑点米カメムシ類を目的とした防除が十分でないこと、規模拡大等により新規需要米を含めた早生から晩生まで幅広い品種が作付けされ、地域内での出穂期間が広がり、好餌条件となっていることなど、複数の要因が重なっているのではないかと考えられています。

種類別の加害の特徴

イネの穂が本種によって吸汁加害されると斑点米(表)を生じ、品質低下(等級格下げ)の原因となってしまいます。

クモヘリカメムシは、口器(針状の管)が弱いいため、内穎と外穎が重なる組織が少し薄くなった部分から吸汁することが多い傾向にあります。このため、被害粒の多くは玄米の側部に斑紋を生じます。イネカメムシは、籾の基部を好んで加害するため、玄米基部が変色する斑点米となります。また、他のカメムシよりも吸汁能力が高く、出穂期~乳熟期に本種の加害がはなはだしい場合には不稔となり、穂は立ったままとなって減収することから、玄米品質だけでなく、収量低下の原因にもなっています。アサスジカスミカメは、口器が弱く、籾を通して刺すことができないため、登熟



図1 斑点米カメムシ類の発生量の年次推移 (8月上旬調査、調査か所は57~70地点)(茨城県病虫害防除所のすくい取り調査結果より)

初期は籾の頂部の隙間から吸汁し、被害は頂部に生じます。また、頂部加害により玄米の発育がアンバランスになることでくさび状に開裂する「カメムシ黒点米」を生じることもあります。登熟中期から後期は、内穎と外穎の間にできた隙間から吸汁するため、クモヘリカメムシと同様に被害粒の斑紋は側部によく見られます。

適期に薬剤防除を

カメムシ類は、まず、水稻の出穂に合わせて水田内に侵入した成虫が加害します。その後、成虫

が産卵し、卵から孵った幼虫が加害します。

発生が少ない場合は乳熟期に1回、発生が多い場合は出穂期～穂揃期と、乳熟期の2回の防除が必要です。

高温の年は発生量が多くなるため、今年も気象情報や病害虫防除所が発表する予察情報等を活用して発生量の把握に努めましょう。

また、薬剤のカメムシに対する効果は高いですが、持続期間があまり長くない、殺卵作用はありません。散布時期がずれてしまうと十分な効果が得られないため、適期防除を心がけましょう。

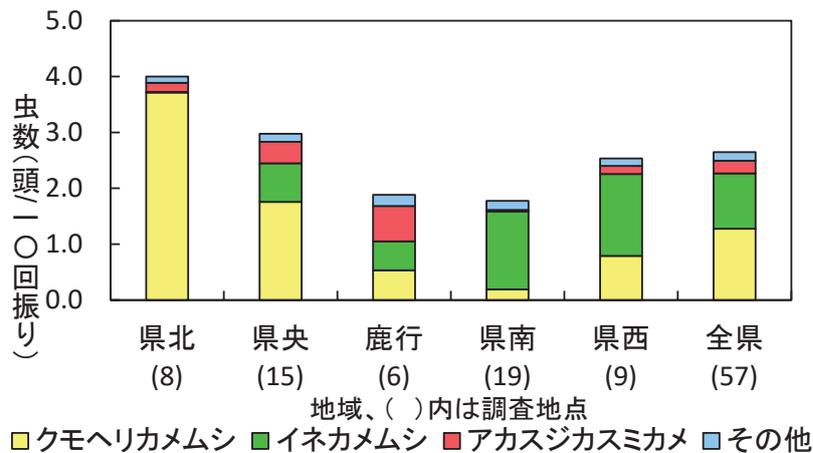


図2 斑点米カメムシ類の地域別虫数 (2019~2023年の平均、茨城県病害虫防除所のすくい取り調査結果より)

表 県内に発生する主な斑点米カメムシ類と加害部位

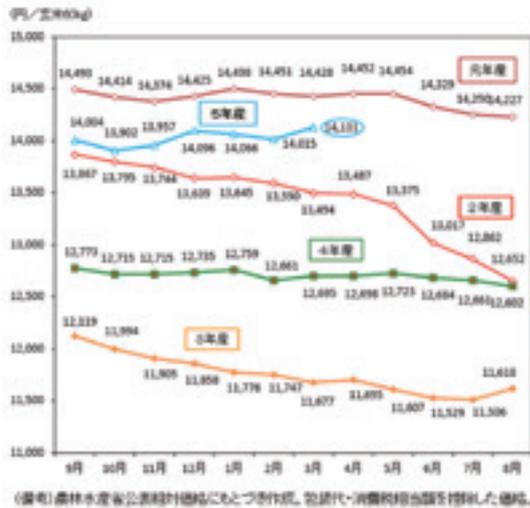
	クモヘリカメムシ	イネカメムシ	アカスジカスミカメ
カメムシの種類			
被害粒と加害部位	 側部加害	 基部加害	登熟初期は頂部、 登熟中期～後期は主に側部を加害する
			 頂部加害  頂部加害 (カメムシ黒点米)

4. 米穀情勢について

全農茨城県本部 米穀部米穀課

1. 5年産米価格の動向

- (1) 農林水産省が公表した5年産令和6年3月相対販売価格（税別・包装抜換算）は、14,131円/60kgと、前年同月と比べて+1,436円となっています。
- (2) また、主要銘柄の市中価格は、コシヒカリが17,200円～18,900円程度となっています。前年同月比は、産地によって異なりますが+4,000円～+4,700円となっています。



(単位:円/60kg, 税抜)

産地	若手	秋田	宮城	山形
銘柄	ひとめぼれ	あきたこまち	ひとめぼれ	はえぬき
6年4月上旬(5年産)①	17,800	19,100	17,900	18,000
5年4月上旬(4年産)②	13,200	14,700	13,500	13,400
①-②	4,600	4,400	4,400	4,600

産地	栃木	新潟	富山	三重
銘柄	コシヒカリ	コシヒカリ	コシヒカリ	コシヒカリ
6年4月上旬(5年産)①	18,300	18,900	17,900	17,200
5年4月上旬(4年産)②	13,600	14,900	13,500	12,500
①-②	4,700	4,000	4,300	4,700

※市中価格は、関東圏・大阪圏・在産、包装込。
 ※本誌市況速報A版から抜粋。
 ※5年産新潟、三重コシヒカリは2等米価格。

2. 5年産の作柄概況

- (1) 農林水産省が12月12日に公表した「令和5年産水陸稲の収穫量」によると、5年産の主食用作付面積は124万2千ha（前年▲9千ha）となり、全国の作況指数は101となりました。

この結果、5年産米の主食用米等生産量は661万トと前年産から▲9万トとなりました。

- (2) 産地別に見ると、「やや良」（対平年比102～105）は北海道・岩手・宮城・福島・山口などの18都道府県、「平年並み」（同99～101）は山形・長野・石川・兵庫・岡山・鹿児島など22府県、「やや不良」（同95～98）は秋田・新潟・富山・愛知・福井などの7県となっています。

3. 今後の需給見通し

- (1) 3月5日に開催された農水省食糧部会における「今後の需給見通し」では、令和5/6年の需要量が681万ト、令和6/7年の需要量が670万ト、6年産米の生産量は、令和5年産の生産量の見通しと同水準の669万トとされています。
- (2) また、12月12日に公表された5年産主食用米の収穫量661万トを加味すると、6月末民間在庫は令和6年が177万ト、令和7年が176万トと減少する見通しとなっています。

(単位:万ト)

	項目	算式	数量
R 5 / 6 年	5年6月末民間在庫量	A	197
	5年産主食用米等生産量	B	661
	供給量計	C=A+B	858
	需要量	D	681
	6年6月末民間在庫量	E=C-D	177
R 6 / 7	6年6月末民間在庫量	E	177
	6年産主食用米等生産量	F	669
	供給量計	G=E+F	846
	需要量	H	670
	7年6月末民間在庫量	I=G-H	176

注) ラウンドの関係で加減が一致しない箇所がある。

5. がんばる種子生産者！



常陸農業協同組合 種子生産部会
生産者 古徳 昭男さん

◆ 経営規模

- | | |
|-------------|-------|
| ・水稲 (コシヒカリ) | 6.2ha |
| ・そば (常陸秋そば) | 1.8ha |

◆ 主な保有機械

- | | |
|----------|----|
| ・トラクター | 3台 |
| ・コンバイン | 1台 |
| ・田植機 | 1台 |
| ・乾燥機 | 3台 |
| ・ユンボ | 1台 |
| ・フォークリフト | 1台 |



トラクター



田植機



コンバイン

◆ 品質向上の取組

土作りが大事だと考えています。

土壌診断を基に、関係機関等の指導を受けながら、健康な土作り、適正な施肥を心がけて品質向上に取り組んでいます。

◆ 栽培管理

苗を植えてから収穫直前まで、特に水管理に注意しながら栽培しています。

この地域は比較的水に恵まれているため、生育段階や稲の状態に応じたこまめな水管理を行い、倒伏や高温障害の防止、収穫作業の効率化に努めています。

◆ 今後の抱負

近年は地球温暖化の影響で、高温障害、水不足、病虫害の多発などによる米の品質低下が問題となっていますが、関係機関や部会員の皆様と相談しながら、優良種子の生産に努力したいと考えています。

6. 穀物改良部ニュース

(1) 令和7年播種用大豆・そば種子生産委託計画が了承

4月30日(火)、当公社(旧穀物改良協会)会議室において、令和7年播種用大豆・そば種子生産委託会議が開催され、生産委託計画が了承されました。

県産地振興課から提示された令和7年播種用大

豆・そばの採種計画は、大豆が面積・数量共に微減、そばについては面積・数量共に微増という内容でした。

当公社では、これに県外からの注文、県外への委託、在庫数量、種子場の種子生産の状況等を考慮したうえで、種子生産計画及び各種子場農協への委託計画を策定しました。

令和7年播種用大豆種子生産委託計画(種子場農協別)

項目 品種	計画面積及び数量		種子場農協別生産委託面積及び数量											
	面積 (ha)	数量 (kg)	常陸(山方)		水戸		やさと		北つくば(真壁)		北つくば(岩瀬)		委託合計	
			面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)
里のほほえみ	44.3	62,000	-	-	21.3	29,200	4.7	6,600	11.5	16,200	7.0	10,000	44.5	62,000
納豆小粒	14.4	13,000	2.0	1,700	11.9	11,300	-	-	-	-	-	-	13.9	13,000
計	58.7	75,000	2.0	1,700	33.2	40,500	4.7	6,600	11.5	16,200	7.0	10,000	58.4	75,000

令和7年播種用そば種子生産委託計画(種子場農協別)

項目 品種	計画面積及び数量		種子場農協別生産委託面積及び数量									
	面積 (ha)	数量 (kg)	常陸(大宮)		常陸(太田)		水郷つくば(美浦)		水郷つくば(阿見)		委託合計	
			面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)
常陸秋そば	40.0	22,000	5.3	3,300	20.7	93,000	10.0	7,500	3.5	1,900	39.5	22,000

(2) 令和6年度茨城県採種部会協議会総会開催

6月7日(金)、ホテル・ザ・ウエストヒルズ・水戸において、茨城県採種部会協議会(会長:谷田部貞雄氏)総会が開催されました。

令和5年度の事業実績として、初めての試みとなった調製技術検討会など、優良種子生産に寄与する活動が実施された旨の報告がありました。

令和6年度の事業計画では、調製程度確認会や現地検討会、視察研修会等について協議し了承されました。

また、任期満了に伴う役員改選が行われ、次期

役員候補7名(再任5名、新任2名)の選任が承認されました。



(3) 令和6年度茨城県稲作・そば共進会の参加者募集

令和6年度の「稲作共進会」、「そば共進会」の参加申込が始まります。

各共進会への参加方法等については、当公社(穀物改良部)ホームページ[<https://www.ibanourin.or.jp/kokumotsu/>]の開催要綱をご覧ください。

多くの方の参加をお待ちしております。

〈ホームページ用QRコード〉



〈参加申込期間〉

稲作共進会 : 9月下旬~10月11日
そば共進会 : 9月2日~10月31日